

【特別調査報告】西厳寺蔵「小川貫式資料」調査報告（六）

藤井由紀子  
川口淳  
中川剛  
日比野洋文



## 〔調査報告掲載にあたって〕

岐阜県各務原市に所在する西巖寺（浄土真宗本願寺派。以下、本願寺派と略す）には、同寺の前住職であり、龍谷大学で教鞭をとった中国仏教史学者、故・小川貫式（以下、貫式と略す）の関係資料が残されている。大藏經研究で知られた貫式が、生涯を通して蒐集した經典類の断簡や、間接的に譲り受けたものながら、本願寺派の法主であった大谷光瑞の探検隊が将来した敦煌文書断簡のほか、和書を含む膨大な量の書籍や自筆原稿の数々が蔵されている。

本研究プロジェクトでは、このうち、昭和十四年（一九三九）四月、本願寺派の興亜留学生として日中戦争下の中国に派遣された貫式が、現地で作成・蒐集した約一五〇〇点の資料を、特に「小川貫式資料」と呼び、分析対象としてきた。<sup>①</sup>資料の内訳は、山西省関係のものが約四百点、南京関係のものが約八百点、北京に関すると思われるものが十数点、中国で購入した書籍類が数百点である。<sup>②</sup>また、その内容に注目すると、興亜留学生という貫式の立場を投影して、本願寺派の開教関係のもの、中国仏教に関する学術調査についてのものと大別できる。

当時、興亜留学生には、中国開教のための現地活動要員としての役割が期待されていた。貫式もまた、南京仏学院という中国人僧侶養成機関での学生教育や、開教の参考とするための中国仏教の現状調査などに携わったが、それに加えて、仏教史学者としての専門的な知見を活かして、

仏教史跡の調査を積極的に行っていたらしく、「小川貫式資料」には五台山や太原市内、および、南京市内の寺院での大藏經調査に関わるものが残されている。ただし、その大藏經調査も、軍の全面的支援を受けて行われていたことは看過できない事実で、宣撫工作活動（文化工作・宗教工作）の一環として調査が実施されていたことが、「小川貫式資料」の内容からは判明する。むしろ、そのことは、学者の戦争協力という現実を物語るものではあるが、視点を変えれば、長いあいだ放置され、朽ちかけていた中国の歴史上、重要な史跡や遺物が、貫式をはじめ、日中戦争下に渡中した歴史学者たちによって再発見され、貴重な文化財として今日に至るまで保存される道筋がつけられていった、その具体的な経緯を教えてくれるものでもあるのである。本プロジェクトではこの点に着目し、戦時下の学術調査の歴史的な意義について、そこで展開された日中間の人的交流の様子をあわせて探りながら、「小川貫式資料」を日中交渉史の「実際」を物語る貴重な資料群として位置づけてきた。

さいわい、二〇一八年度に「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト―興亜留学生小川貫式の記録より」として、日本学術振興会の科学研究費助成事業に採択されたことで（基盤研究C 課題番号18K09017 二〇一八―二〇二二年度 研究代表者藤井由紀子）、中国での実地調査を行うことも可能となった。朝鮮や台湾といった他地域との比較調査も視野に含めながら、中国現地での調査に着手し、本願寺派の中国開教拠点であった上海、および、同派の出張所（太原西本願寺）が開設さ

れた山西省の省都太原市で、関連調査をまずは行ったが、特に太原での調査では想像を超えて興味深い進展をみた。というのも、貫式が五台山等で発見した仏典類が保管された太原博物館、これはいくつかの経緯を経て、現在は山西省民俗博物館として現存しているが、ここで貫式発見の仏典類の追跡調査を行うかたわら、同館に死蔵されてきたという日本統治時代資料の合同調査計画が持ち上がるようになったからである。

ところが、周知のごとく、二〇一九年十二月、武漢から新型コロナウイルスの一報が入り、研究プロジェクトの計画は大きく狂いはじめた。ウイルスは一ヶ月も経たない間に中国全土へと感染を広げていったばかりか、翌年には全世界がその脅威にさらされることになった。二〇二〇年四月、日本でも第一回目の緊急事態宣言が発令されてから、実に四度の緊急事態宣言の発令を数え、特に二〇二一年六月下旬以降に流行拡大した第五波・第六波は、変異種によるものとされ、全国で過去最多となる新規感染者数を記録した。結局、二年経った現在も、ウイルスは沈静化の兆しをみせてはおらず、中国への渡航条件は依然として厳しいまま、当面、現地調査の見通しは立てられない状況にある。

それでは、今後、研究プロジェクトをどうするか。現在、プロジェクトの運営資金は、科研費に全面的に依存している。山西省民俗博物館の協力を得て、調査が新たな展開をみせはじめたこともあり、科研費申請時の研究計画通り、できうるかぎり、中国での実地調査を行いたいと考え、年限のあるなか、延長措置をとって予算を温存してきたが、それも

そろそろ限界である。そこで、当初、中国現地調査の結果を踏まえて構築する予定であった、「小川貫式資料」公開のための画像データベースを、今年度、一部の資料に限定して「試行版<sup>⑦</sup>」として立ち上げ、公開に踏み切り、これを中核にプロジェクトの方向性を見直すことにした。限定的な条件のなか、画像データベースをどう構築するか。その具体的なアイデアと設計は川口淳が担当したが、資料の所蔵者である西厳寺住職の小川徳水氏は、資料公開について肯定的な立場であり、「試行版」の構築過程で作業の自由度が確保されたことは、本当に幸甚なことであった。以下、本年度の報告では、科研成果報告の一環として、その試みについて紹介することにした。

(文責：藤井由紀子)

# 注

(1) 西厳寺蔵「小川貫式資料」については、同朋大学仏教文化研究所を母胎として、歴史学(古代・中世・近代)、仏教学(日本・東洋)など、当該資料に興味を寄せる研究者の協力を得て、現在までに六年間にわたって調査が行われてきた。各年度の調査メンバーは以下の通りであるが、調査メンバーは必ずしも固定的ではない。二〇一六年度：小川徳水、工藤克洋、高木祐紀、中川剛、藤井由紀子。二〇一七年度：大舛啓、小川徳水、花榮、北村一仁、工藤克洋、高木祐紀、中川剛、新野和暢、日比野洋文、藤井由紀子。二〇一八年度：花榮、梶浦晋、北村一仁、中川剛、新野和暢、日比野洋文、藤井由紀子。二〇一九年度：小川徳水、花榮、中川剛、日比野洋文、藤井由紀子。二〇二〇年度：小川徳水、花榮、中川剛、日比野洋文、藤井由紀子。二〇二一年度：小川徳水、川口淳、中川剛、日比野洋文、藤井由紀子。

(3)

また、調査過程で得られた知見については、問題提起も含めて、論文・史料翻刻・史料リスト等をまとめた形で研究所紀要に掲載してきた。藤井由紀子・中川剛・高木祐紀・小川徳水・工藤克洋「特別調査報告 西厳寺蔵「小川貫式資料」調査報告(一)」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十六号、平成二十九年三月)。藤井由紀子・小川徳水・北村一仁・大舩啓・工藤克洋・高木祐紀・中川剛・新野和暢・花栄・日比野洋文「特別調査報告 西厳寺蔵「小川貫式資料」調査報告(二)」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十七号、平成二十九年十二月)。藤井由紀子・小川徳水・中川剛・日比野洋文「特別調査報告 西厳寺蔵「小川貫式資料」調査報告(三)」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十八号、平成三十一年三月)。藤井由紀子・花栄「特別調査報告 西厳寺蔵「小川貫式資料」調査報告(四)」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十九号、令和元年三月)。藤井由紀子「特別調査報告 西厳寺蔵「小川貫式資料」調査報告(五)」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第四十号、令和二年三月)。さらに、資料分析に基づいて、『戦時下の中国仏教研究―西厳寺蔵「小川貫式資料」と山西省調査記録』(同朋大学仏教文化研究所、平成二十八年十二月)、『戦時下の中国仏教研究Ⅱ―石壁山玄中寺復興と「小笠原宣秀資料」』(同朋大学仏教文化研究所、平成三十年七月)という二つの展覧会を開催している。スクラップブックとアルバムの貼付資料を一点として数えている。地域で見ると、山西省資料群と南京資料群との二つに大別されることになる。

(2)

(9)

も民俗を中心としたものに変更されて現在に至っている。日中戦争時、貫式らが発見・調査した仏典類は太原博物館に保管されたことが「小川貫式資料」中の内容からはわかるが、今回の調査によってそれらの仏典類は、現在、同博物館には所蔵されていないことが判明した一方で、山西省博物院へと移管された可能性も考えられることから、山西省民俗博物館陳列部主任安海氏を介して博物院に対して確認調査を依頼することが決定された。「中華人民共和国湖北省武漢市における原因不明肺炎の発生について(第一報)」(厚生労働省、令和二年一月六日)。

山西省政府は、国外から山西省内に移動するすべての者に対して、原則十四日間、集中隔離所において集中隔離医学観察を行うことを、また、南京市が所在する江蘇省では、指定施設での原則十四日間の隔離を実施した後、さらに自宅・ホテル等での十四日間の隔離の実施を求める方針を公表しており、費用面でも、日程面でも、極めて調整が難しい状況にある。

ここにいう「試行版」とは、今後、管理固定費等を確保のうえ、さらにパフォーマンスがすぐれたサイトにバージョンアップしていくことを想定したスタートアップバージョンのことを指しており、移行までの間の仮運用を予定している。

川口淳は、同朋大学仏教文化研究所所員。令和四年二月より科研の研究分担者。最新の論考に、日比野洋文・川口淳「仏教文化研究所蔵・調査記録写真のデジタル化とその利用環境構築 同朋大学仏教文化研究所における写真ファイルの電子化計画とその実行／歴史史料調査研究に特化したデジタルアーカイブアプリ開発―画像認識技術を利用したテキストメタデータ登録試論―」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第四十号、令和二年三月)がある。

小川徳水氏は小川貫式の長男であり、西厳寺の現住である。また、調査二年目となる二〇一七年度からは本研究プロジェクトの参加メンバーとなり、「小川貫式資料」についての課題共有を図っている。

(8)

(7)

(6)

(5)

(4)

## 「小川貫式資料」の学術公開とデータベース構築の試み

### ―新型コロナウイルス流行下での資料共有方法の模索と構築―

藤井 由紀子  
川口 淳  
中川 剛  
日比野 洋文

### 〈はじめに〉

「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト―興亜留学生小川貫式の記録より<sup>1)</sup>」として、日本学術振興会の科学研究費助成事業に採択されてから、約三年半が経過した。その間、「小川貫式資料」の分類・整理、および、基礎データ採集を行い、その全貌を把握するとともに、いくつか具体的な研究テーマを決めて、資料に優先順位をつけ、優先されるべき資料群については、海外での実地調査と写真撮影とを平行して行ってきた。

しかしながら、残念なことに、着手二年目の後半から、新型コロナウイルスが流行をみせはじめ、国外はもとより、日本国内における研究活動さえ著しく阻害される、という事態に陥った。具体的には、国内・国外における資料調査の中止、中間成果報告としての展覧会・シンポジウムの計画見直し、写真撮影の遅延、といった状況を余儀なくされることになったわけであるが、それでもウイルス流行の初期段階ではまだ、ウイルスの沈静化を待って研究活動を再開させていく見通しを立てていくことが可能で、そのための資金を温存するという形をとって、事態の好転を祈った。ところが、周知のごとく、ウイルスの変異種<sup>2)</sup>が登場し、感

染拡大とウィルス克服とはイタチごっこのような状態で、以前と同様の形での研究活動はほぼ望めなくなったといっても、もはや過言ではない。

そこで、今年度はプロジェクト活動の中心を、「小川貫式資料」の画像データベース構築、および、「試行版」の公開（二〇二二年三月公開）に置くこととした<sup>②</sup>。もちろん、当該資料の画像データベース公開は、プロジェクト着手当初から予定されていたものではある。ただし、それは、資料情報に現地調査の結果を反映させた総合情報型とでもいうべきもので、遺憾ながら、中国での実地調査が中途のまま再開できずにいることで、公開内容を当初の想定とは大きく変更せざるをえなくなった。以下では、科研成果報告の意味合いも兼ねて、その「試行版」画像データベース構築の試みについて書記してみることにしたい。

## 〈一「小川貫式資料」画像データベースについて〉

小川貫式（一九二二～二〇〇六、以下、貫式と略す）は、昭和十四年（一九三九）四月、龍谷大学大学院修了直後から三年間、浄土真宗本願寺派（以下、本願寺派、もしくは、西本願寺と略す）の興亜留学生として、日中戦争下の中国に渡り、仏教史学者としての専門知識に基づいて中国仏教史跡を調査した人物である。貫式が残した遺稿類は、学生時代のノートから、戦後の著作の草稿類に至るまで、約千点を数えるが、本プロジェクトでは、中国留学期間のもの約百五十点（アルバム貼付の資料・写真類

【特別調査報告】西厳寺蔵「小川貫式資料」調査報告（六）

を一点として数えると約千五百点<sup>③</sup>）を対象として絞り込み、これを「小川貫式資料」と呼称して、分類・整理をしたうえでデジタル化を行い、画像データベースとしてWeb上で広く公開することを目指してきた。

なお、「小川貫式資料」を画像データベース化する理由については、次の二つの点による。まず、一点目は、資料の内容が視覚情報の面でも多岐にわたっていることである。すなわち、「小川貫式資料」を見ていくと、貫式自筆の調査日誌やメモ・原稿・拓本類のほか、情報量の多さで特に興味をひくものとして、写真や現地で入手したビラ・チラシ・パンフレット・ポスター・レジュメ・式次第などを、台紙にぎっしりと貼りこんだアルバムやスクラップブック類が数冊あり、その複雑な状態とともに、それら貼付物をひとつひとつ確認できるような公開方法をとることで、資料としての魅力や歴史的意義が伝わりやすくなるのではないかと、と考えたからである。また、細かいことながら、たとえば、崇善寺大蔵經の調査日誌が、赤い野線の陸軍用便箋を使って作成されるなど、中国での貫式の学術調査と陸軍特務機関との関係が、画像であれば即座に把握できるような資料も、少なからず含まれていることも軽視できず、こうした資料を視覚的に活かした形で公開したい、と考えたためである。

理由の二点目は、新しい資料ジャンル形成への試みを兼ねていることである。本プロジェクトの研究対象である貫式を含め、戦時下の中国に渡って調査活動を行った学者たちの残した遺稿やアルバム類は、従来、関心をさほど持たれることなく、遺族によって廃棄、或いは、死蔵され



るケースが多かった。しかしながら、「戦争と学問」という政治的・社会的文脈のなかにそれらを置いて捉え直すことができれば、そこに史料価値も生まれ、日中交渉史を考察するための新たな資料群を形成することが可能になるのではないか。そう考えたからである。そして、この「小川貫式資料」はその試みの端緒であり、かつ、これを画像データベースの形で公開することで、類似資料の発見につなげやすくすることを、あわせて企図したのである。

さて、上記のような考えのもと、「小川貫式資料」の全貌を把握するべく、基礎データを取りつつ、地域・年別ごとに分類・整理する作業から調査に着手した。その結果、「小川貫式資料」の中核をなすのは、南京関係の資料約六十五点（アルバム貼付資料を一点として数えると約八百点）と、山西省関係の資料約五十五点（スクラップブック貼付資料を一点として数えると約四百点）、以上二つの資料群で、その中身を丁寧に見ていくことで、興亜留学生としての貫式の中国における大まかな足どりと、各資料との関係を確認することができた。

すなわち、昭和十四年（一九三九）四月、興亜留学生として渡中した貫式は、航路、まず上海に入ったこと、その上海で西本願寺上海別院の輪番、兼、中南支布教総監・開教総長であった小笠原彰真に面会し、小笠原の指示で南京へと向かったこと、同年六月以降、西本願寺南京出張所の駐在となったこと、さらには、同派運営の中国人僧侶養成機関であった南京仏学院の講師として教鞭をとり、中国人学生らと二年間、古林寺

で起居をともしたこと、昭和十六年（一九四一）四月、北支地域で学術調査を行うため、仏学院の職を辞して北京へと向かったこと、同年六月、北京を発って太原入りし、本願寺派の出張所であった太原西本願寺を拠点として、太原市内や五台山で仏教史跡調査を行ったこと、翌年三月には母校龍谷大学で職を得たことを理由に中国から帰国したことなどが明らかとなった。そして、このような貫式の足跡をほぼそのまま反映して、南京の資料群は中国開教や仏学院での僧侶養成に関わるもの、山西省の資料群はもっぱら仏教史跡・仏典調査に関わるものといった形で、各資料群の特徴をそれぞれ抽出することができた。そして、以上の資料整理の結果に基づいて、次年度以降、順次、中国での現地調査と、資料撮影とを進めていくことになった。

## 〈二〉「試行版画像データベース」の公開に向けて

中国での現地調査は、平成三十一年（二〇一九）より着手した。まずは、「小川貫式資料」のうち、山西省での学術調査の拠点であった太原関係のものに的を絞り、そのための準備として比較となりうる文献資料を博搜し、その上で太原での現地調査に臨んだ。もちろん、資料の年代順からすれば、南京のほうを先に着手すべきであるが、南京の資料群は開教事業との関わりが強く、「戦時下の学術調査と人的交流」というプロジェクトのテーマとの兼ね合いもあり、山西省の資料群に関する現地調



査から始めることを決定した。なお、太原での現地調査の詳細については、一昨年度の報告で紹介した通りである。<sup>⑤</sup>

また、現地調査と並行して、画像データベースに向けてのデジタル写真撮影も、山西省関係のものから着手することとなった。なかでも、情報量が最も多いアルバムを重視し、「山西省アルバム」という仮称を用いて、その撮影から作業にとりかかった。デジタル写真撮影は、中川剛と日比野洋文の両名が担当したが、アルバムを一見して課題となったのが、台紙に貼りこまれた写真や資料類の扱いであった。そもそも「山西省アルバム」は、貼付された資料数が多く、アルバム一冊だけで約三五〇点と、かなりの数に上っている。そのため、それらを一点の資料とみなし、時間と労力を割いて撮影を進めるかどうか、方針を決めなくてはならなかった。当然、アルバムそれ自体が資料でもあることから、撮影の便宜のため、貼付資料を剥がすなどの処置をとることはできない。撮影にはそれ相応の工夫が必要であったが、わけても特に難しいと思われたのが、アルバム内に多数貼りこまれた4 cm×4 cmという小サイズのモノクロ写真である。貫式の子息であり、本プロジェクトの協力メンバーでもある西巖寺住職小川徳水氏によると、アルバムに貼付された比較的大判の写真は陸軍等、公的機関から提供されたものと推定されるが、問題の小サイズの写真は、貫式個人のカメラで撮影されたものなのだという。実際、不鮮明なものも少なくないが、拡大鏡でその画像を確認してみると、人物が写りこんでいるなど、貫式の学術調査現場ではどんな人

的交流がなされていたのか、情報となりうる要素が少なからず見てとれた。そのため、結局、貼付されたすべての資料について、できうるかぎり内容が識別できるよう留意しながら、一点、一点、条件を変えて慎重に撮影を重ねていくことを選択した。大変な作業ではあったが、結果として十分な画質のデジタル画像が蓄積されたことで、公開の面だけでなく、アーカイブスとしてこれらを保存していくという面でも、意義ある作業となったのではないかと考えている。

次に、画像データベースの設計・デザインは、川口淳が担当した。その詳細は挿図を参照していただきたいが、資料の画像のほか、アルバムの各貼付資料については、印刷物の場合は標題、新聞切り抜きであれば見出し、写真に関しては貫式自筆のキャプションといったように、内容がわかるような情報をテキストとして拾い出す形をとった。なお、当該サイトは、現状では管理固定費など、恒久的・安定的に運用する上での課題が残されている。そこで、機能上、制限はあるものの、ランニングコストやサイトの保守費がかからず、無料で運用できるという利点を何より重視して、まずはこの形を採用した。なお、次章で触れていくように、コロナ禍の影響を考慮して、今後、調査活動の優先を少し変え、画像データベースを中核としたプラットフォームづくりに取り組めないかとの考えを持っており、よりパフォーマンスのすぐれたサイトに移行していくまでの仮運用版であるとの意味合いをこめて「試行版」と呼称し、掲載する資料の内容も限定して公開することにした。以上のように、画

# 日中戦争下の学術調査と人的交流を 探る プロジェクト — 興亜留学生小川貫弐の記録 —



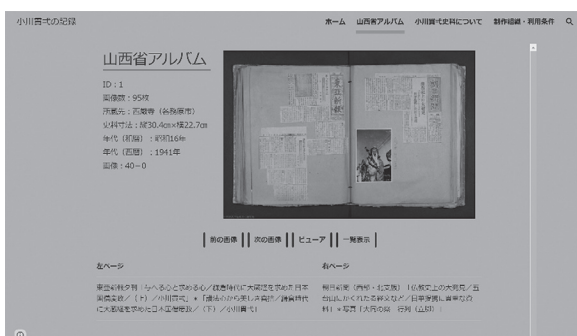
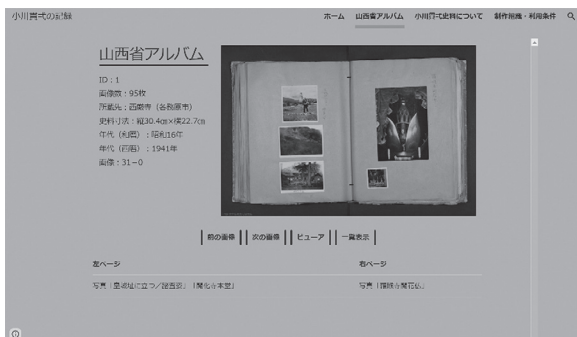
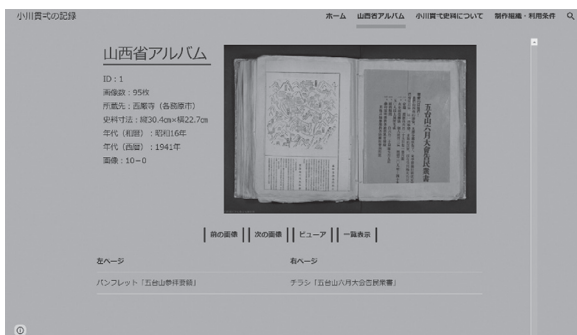
## 山西省アルバム

所蔵者：西蔵寺（岐阜県各務原市）  
寸法：縦30.4cm×横22.7cm  
年代：昭和16年（1941年）



西蔵寺蔵「小川貫弐直経」のうち、山西省関係の資料を添付したアルバムの内容を公開したものである。昭和十七年（一九四二）八月、貫弐は北京から山西省に入り、省都である太原市中心部に所在した太原出張所（太原西本願寺）を拠点に、市内と五台山とで仏典調査を行った。本アルバムは、本願寺派の中国関係事業、および、それと密接に関連し、陸軍特務機関の支援のもとで行われた中国仏教調査の様子を具体的に示す貴重な資料である。特に、太原の写真部は、昭和十二年（一九三七）日本軍の太原攻陥後、特務機関が都市計画を立て、市街地復興を図っていた頃の風景を伝えるものであり、五台山の写真・資料群は、陸軍が宗教文化工作の一環として行った五台山復興（「八月復興大会」）に因るものである点で注目される。

3-1	非表示	
4-0	「新聞記事（小川貫弐著）「五台山六月大会を控へて（二）高宗皇帝の恩顧を受く 入唐求法僧靈仙三蔵を偲ぶ」、絵葉書「大文殊寺の白石牌楼」（裏にスタンプ）」	絵葉書袋「五台山朝山記念明信片」、新聞記事（小川貫弐著）「五台山六月大会を控へて（一）約一千百年以前に入山 入唐求法僧靈仙三蔵を偲ぶ」
5-0	新聞記事（小川貫弐著）「五台山六月大会を控へて（四）寺院の浴場で毒殺さる 入唐求法僧靈仙三蔵を偲ぶ」、絵葉書「由南台懷鎮眺望菩薩頂及塔院寺宝塔」（裏にスタンプ）、散華「南無阿彌陀仏」表面銀引き	新聞記事（小川貫弐著）「五台山六月大会を控へて（三）憲宗皇帝の追慕し入山 入唐求法僧靈仙三蔵を偲ぶ」、絵葉書「碧山寺玉仏」（裏にスタンプ）
6-0	陣中新聞記事「六月大会の最高潮・跳鬼の日の盛況」、同記事「五台山物語（1）中国唯一の大霊場／千九百年前後漢時代に開山／外敵から聖地守った僧兵」	新聞記事（小川貫弐著）「五台山六月大会を控へて（五）宋月六日に追悼慰霊祭 入唐求法僧靈仙三蔵を偲ぶ」、絵葉書「菩薩頂跳鬼之扮装」（裏にスタンプ）、散華「南無阿彌陀仏」表面銀引き
7-0	陣中新聞記事「五台山物語（3）日本から求法者続き／鎌倉室町文化の母体に」、散華「南無阿彌陀仏」表面銀引き	陣中新聞記事「五台山物語（2）海拔三千米の霊境／中台碧巖峰を中央にして／聳立つ五の聖峯」、同記事「五台山の塔院寺に参詣する蒙古人」



像データベースの設計面については再構築の余地もまだ十分に残っているが、どんな形であれ、まずは公開することでのメリットを最優先に考えた結果であることを、ここに付言しておきたい。

### 〈三 関係資料発掘のためのプラットフォームづくりに向けて〉

「小川貫式資料」の画像データベースは、前章でも述べたように、単なる遺稿・遺品として従来は見過ごされてきたものに対して、新たに史

【特別調査報告】西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告（六）

資料（「岩上先天資料」と仮称）、もうひとつは、具体的な内容は未確認ながら、山西省民俗博物館に死蔵されてきたという日本統治下の太原に関する資料である。

ちなみに、「岩上先天資料」については、二〇一八年十一月に簡易調査を行っており、戦争時の中国で描いた画稿と、自ら採取したと思われる拓本で構成される。この先天は、長野にある真宗大谷派寺院の生まれながら、東京美術学校を卒業したという日本画家で、美校卒業後に大谷大学で僧籍を取得したという、やや異彩な経歴を持つ人物である。そし

料的価値を見出し、日中交渉史考察のための新ジャンルの資料群を形成する試みでもある。実際、「小川貫式資料」の調査に着手して以降、近代仏教史研究者などからの教示を得て、中国仏教史学者である小笠原宣秀が残した山西省玄中寺復興に関する資料（「小笠原宣秀資料」と仮称）、南京仏学院で貫式とともに講師をつとめた亀谷法城に関する資料（「亀谷法城資料」と仮称）を比較研究する機会が与えられ、これらが持つ史料性については、過去の報告内において個別に論じてきた<sup>⑦</sup>。また、これに加えて、本プロジェクト独自の新発見資料もある。ひとつは、北京美術学校教授をつとめ、五台山調査では貫式とも交流のあった岩上先天（以下、先天と略す）の残した



て、日中戦争当時は北京美術学校の教授として中国で作画活動をしていたこと、北京美術学校長を務めた服部亮英<sup>⑧</sup>とともに興亜美術展覧会<sup>⑨</sup>の開設や北京漫画協会の結成に関わっていたことなどが、今回発見された遺稿類からは判明した。時期的には昭和十六年（一九三九）頃のものが多く、貫式が南京仏学院を辞してのち、学術調査のために北京へと居を移した頃とちようど重なっていることは興味深い<sup>⑩</sup>。また、先天が採取した碑文・仏龕などの拓本も多数残されており、そこには貫式の五台山調査の時に採集されたかと推される拓本なども含まれている。

また、二〇一九年十月、貫式の学術調査の活動拠点であった山西省太原で現地調査を行った際、太原博物館の後身である山西省民俗博物館に、整理もされぬまま死蔵されてきたという日本統治時代の資料があるとの情報を得た。未整理のため、閲覧はほんの一部にとどまり、その全貌は明らかではないが、今後、「小川貫式資料」との関連性を探りつつ、これらを当該博物館と共同で調査することで意見の一致をみた<sup>⑪</sup>。日中戦争

後の中国では、日本敗戦の混乱を経て、国共内戦、文化大革命など、いくつもの困難を経験してきており、文化財はもちろん、近代史を復原する、その当時の生の記録があまり残されていない。そうした状況を鑑みても、日本国内に残された「小川貫式資料」の画像データを中国の研究者と共有するとともに、日本語で書かれていることで未整理のままにされてきた、統治時代資料の調査を共同で進めることには大きな意義があり、渡航条件等、新型コロナウイルスに関する中国側の措置緩和を待って準備を進める計画である。

このように、「小川貫式資料」を出発点として、その調査研究の過程で、いくつかの資料の存在が明らかになってきた。今後の課題としては、さらなる資料の発掘につとめることと、それらを相互に関連づけていくこと、そして、そうした今まで研究の俎上にはあげられてこなかったものを点と線とで結び、日中交渉史を考察するための新たな資料の可能性を開いていくことにある。その上で、もし所蔵者の許可が得られた場合には、「小川貫式資料」と同様、画像データベース化を図り、それらを蓄積して日中交渉史に関する新たな資料プラットフォーム形成につなげていきたい、と考えている。

とはいえ、現今の活動は科研費に全面的に依存しており、その資金には限りがある。今回の「試行版」画像データベースのバージョンアップはむろんのこと、新たに発見された資料についても、調査費用やデジタル写真撮影等に必要なりソースが決して確保できていないわけではない。



しかしながら、調査研究の成果をどう活用していくかは、やはり考えておかななくてはならない問題であろう。特に、本プロジェクトは、史料価値を一から問うている新たなジャンルの資料への取り組みだけに、認識が広まれば、発掘資料の数が増えていくことも十分に予想される。所蔵先もさまざまで、形態もまちまちといった状況が想定されるなか、資料そのものを移管して一ヶ所に集めるのではなく、デジタル画像化して、画像データベース内に集結させる形で、資料プラットフォームを築いていければ、コロナ禍によりテレワーク時代を迎えた、<sup>12)</sup> 今後に向けての新たな資料の共有方法になりうるはずである。そうした資料プラットフォームづくりに向けてのいわば起爆剤として、「小川貫式資料」画像データベースを公開したことを、本稿では報告してみた次第である。

研究者もまた時代に規定された歴史的な存在にすぎない。本プロジェクトのテーマでもある「戦争と学問」という視座からも、近代戦争下の学術調査とその周辺動向に関する資料を画像データベースによって可視化することで、近代学問の客観性・実証性の質そのものを問い直し、新しい研究方法の構築につなげていけるのではないか。そうした期待を持ちつつ、次なるステップへの準備を進めたいと思う。

## 〈おわりに〉

二〇二一年秋、山西省から大洪水のニュースが飛び込んできた。山西

省の省都である太原市は、黄河の支流である汾河の中流域に位置し、そもそもが水の都である。川幅が五百メートルもある汾河が、市街地のほぼ中央を南北にゆったりと流れ、そうした大河に接した都市だからだろう、市民の憩いの場となっている文瀾公園や迎沢公園一帯はもともと低湿地帯だったらしく、明時代には海子堰と呼ばれる堰を設けて太原府城内の洪水被害に備えた、その遺構だとされる。<sup>13)</sup> その太原を含め、山西省一帯に、今回、平均雨量の十倍近くの雨が降った。ニュース上、深刻に伝えられるのは、エネルギー問題に直結する石炭鉱山の閉鎖ばかりであるが、今回の洪水で市街地にも大きな被害が出た、との報道もある。新型コロナウイルスの沈静化を待つあいだにも、刻一刻と状況は変化していく。調査の過程でその存在にたどりついた資料をどう保全するのか。今回、「小川貫式資料」の画像データベースの公開によって、資料の所蔵者の方々とプラットフォーム構築の共通認識を持ち、資料の散逸を防止していく、その端緒を開きたい、と考えている。

## 注

(1) 基盤研究C 課題番号18K00917 二〇一八―二〇二一年度 研究代表者 藤井由紀子

(2) ここにいう「試行版」とは、今後、管理固定費等を確保のうえ、さらにパフォーマンスがすぐれたサイトにバージョンアップしていくことを想定したスタートアップバージョンで、移行までの間の仮運用を予定している。なお、試行版は、二〇二二年三月より、以下のURLにて公開されている。<https://sites.google.com/view/doho->

bukken-ogawadocuments

〔小川貫式資料〕は約百五十点あまりの資料群であるが、写真や諸資料を細かく貼りこんだアルバムとスクラップブック類が計六冊あり、一冊につき百点から三百五十点の写真類が貼付された、これら貼付資料を一点の資料として扱うと、資料総数は千五百点を超える。

〔小川貫式資料〕中のアルバム類は計六冊であるが、そのうち二冊が南京関係のもの（南京仏学院、棲霞山調査）、一冊が「山西省アルバム」で、残り三冊は、貫式の私信を貼りこんだもの、郵便切手や紙幣を貼りこんだもの、絵葉書を貼りこんだものとなっている。

藤井由紀子「西巖寺蔵「小川貫式資料」と中国（一）」——山西省太原における動向を中心に」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十九号、令和二年三月）。また、本願寺派の中国開教の拠点であった上海でも、今後の中国調査をサポートを依頼する中国人研究者との打ち合わせを兼ねて、現地調査を実施している。いずれも、調査メンバーは藤井由紀子と花栄（内蒙古社会科学学院言語文字研究所研究員・同朋大学仏教文化研究所客員所員）の二名である。

ともに同朋大学仏教文化研究所客員研究員。中川は近代仏教史、日比野は近世文学史を専門とする研究者であるが、研究所の法宝物調査を多く経験しており、資料の扱いとその撮影スキルについて卓抜したものがあ、今回、両名にデジタル写真撮影を依頼することとした。

藤井由紀子・小川徳水「山西省玄中寺の復興と「小笠原宣秀資料」について——「小川貫式資料」の史料性をめぐって」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十七号、平成二十九年十二月）。中川剛「新出の「亀谷法城史料」について」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十八号、平成三十一年三月）。

北京美術学校の学校長をつとめ、興亜美術展覧会を開設した服部亮英は、真宗高田派の慈教寺の長男である。

興亜美術展覧会の開設には、中国の美術振興という名目のもと、日中戦争後に日本軍が樹立した中国臨時政府を擁護するために設立された中国民衆教化団体である新民会が関わっており、宣撫工作活動

の意味合いを強く帯びていた。「岩上先天資料」には、興亜美術展覧会出品した作品の下図も含まれている。なお、先天の場合、戦意昂揚のため、戦地で戦争画を描いた従軍画家ではなく、山西省の五台山や満州の熱河など、中国各地の風景や風俗を明るい画調で描いており、画稿群に關していえば、戦争と直接結びつくような画題はほとんど見つけられない。

〔小川貫式資料〕中には北京関係の資料はさほど含まれていない。「岩上先天資料」はこれを補完することも期待できる。

山西省民俗博物館の陳列部主任の安海氏より、同博物館には占領時代のものと思われる日本人関係の資料が未整理のまま残されており、日本語で書かれていることから、これを整理する見通しもついている、という情報を開示された。そこで、「小川貫式資料」との関連も含めて、これら占領時代の未整理資料を本格的に調査させていたべく承諾を得て、博物館側でも、調査が効率的に行えるよう、次回訪問までにある程度、準備を整えておいてくださる約束となった。

テレワークとは、離れたところを意味する「tele」と「work」とを組み合わせた造語で、情報通信技術を活用し、場所や時間の制約を受けずに働く形態を指す言葉である。

清の光緒年間（一八七五—一九〇八）に水池を利用して庭園化が図られたとみられる。